

筆者は2020年3月末で任期を終え、日本に帰国することになりました。2016年1月のパリ日本文化会館館長就任以来4年3か月になります。その間、開館20周年という重要な節目を迎えるとともに、ジャポニスム2018という一大文化行事に携わるという、非常に幸運なめぐりあわせとなりました。

さまざまな事業を無事にこなすことができたのも、ひとえに皆様の多大なご支援と同僚たちの協力の賜物であり、改めてすべての関係者に御礼を申し上げます。

そのようなわけで、本号は筆者が執筆する最後の「パリ日本文化会館ハイライトニュース」となります。これまでのご愛顧に心から感謝しつつ、いつかまた別の形で皆様に接することができることを願っております。長らくのご愛読、有難うございました。

1

目次

- 1. レクチャー・デモンストレーション/展示「源氏物語と日本文化」 2**
2020年2月4日(火)から2月15日(土)までパリ日本文化会館の地上階ホールで「源氏物語と日本文化」と題する展示会が開催されました。香道二十三代御宗家の三條西堯水先生による源氏香のレクチャーと観客全員が参加する聞香、衣紋道高倉流二十六世御宗家高倉永佳氏による十二単の説明と永井とも子教授の指導のもと、実践女子大学の学生さんたちによるいろいろな花の形をあしらった帯締めでのデモンストレーションや十二単の着付けの実演等が行われました。
- 2. 寛仁親王妃信子殿下ご来館 4**
2020年2月11日(火)11時50分から12時40分の間、寛仁親王妃信子殿下が、パリ日本文化会館にご来駕になり、地上階展示、6階茶室、4階図書館、3階展示ホール等をご視察になりました。
- 3. 地上階展示「Japon Afrique intimes」 5**
2月18日(火)から3月21日(土)までカメルーン出身のアーティスト兼デザイナーであるセルジュ・ムアングさんがプロデュースした「和フリカ」というコンセプトのもと「WAFRICA - Japon Afrique intimes」と題する展示会を地上階ホールで実施します。同展初日オープニングの様をお伝えします。

① レクチャー・デモンストレーション/展示「源氏物語と日本文化」

2020年2月4日(火)から2月15日(土)までパリ日本文化会館の地上階ホールで「源氏物語と日本文化」と題する展示会が開催されました。これは実践女子大学の佐藤悟教授を中心に同大学で進めている「源氏物語研究の学際的・国際的拠点形成」という研究の一環として実施されたものです。

2019年の3月に佐藤教授が来館された際にお話を伺い、興味深いプロジェクトでしたので、受け入れを決めたのです。弊館ではイナルコやパリ・ディドロ大学などとの共催で、これまでも源氏物語に関する学術的研究発表会を行ってきました。例えば2017年3月には「源氏物語を書きかえる: 翻訳、注釈、翻案」というテーマで外国における源氏物語の翻訳と受容がどのようなものであるか、それぞれの国の歴史的背景とともに議論するシンポジウムを開催しました。

今回の企画は、13世紀鎌倉時代の『源氏物語』の書写を研究し、またできるだけ紫式部の生きた時代に近い時代の衣装の復元や着付け(衣紋道)、貴族が嗜んだ香道など、『源氏物語』を文字からだけではなく、当時の宮廷貴族の生活を踏まえながら再考していこうというものです。厳密な時代考証を基に、『源氏物語』を立体的にとらえ、理解しようとする試みは非常に意義深く興味深いものであると思います。

展示期間中の2月8日(土)16時から19時まで、満席となった小ホールで香道と十二単の着付けのレクチャー・デモンストレーションが開催されました。

まず古典研究家として有名な三條西実隆のご子孫である香道二十三代御宗家の三條西堯水先生による源氏香のレクチャーと観客全員が参加する聞香が開催されました。聞香の正解は「若紫」で筆者は運よく当てることができました。



舞台上で聞香の実演をする実践女子大学の学生さんたちと会場から飛び入り参加した女性2人

続いて衣紋道高倉流二十六世御宗家高倉永佳氏による十二単の説明があり、その後、インターナショナル儀礼文化教育研究所の永井とも子理事長の指導のもと、実践女子大学の学生さんたちによるいろいろな花の形をあしらった帯締めへのデモンストレーションや十二単の着付けの実演が行われました。

三條西御宗家と今上天皇ご即位の装束を担当された高倉御宗家がそろって講演されることは日本でもめったにないことだそうで、お二人からの香道と衣紋道の説明を受けたフランスの観客たちは大いに満足していました。とりわけ聞香に参加したり、十二単の着付けを直に見たりする機会は当地では稀有な経験であり、終了後も大勢の人たちが舞台の周囲に集まり十二単を脱衣した後の「空蝉」を鑑賞しながら余韻に浸っているように見えました。



十二単の古典的着装（左）と近世的着装（右）のデモンストレーション



地上階ホールに展示された平安装束

② 寛仁親王妃信子殿下ご来館

2020年2月11日(火) 11時50分から12時40分の間、寛仁(ともひと)親王妃信子殿下が、パリ日本文化会館にご来駕になり、地上階展示、6階茶室、4階図書館、3階展示ホール等をご視察になりました。



「塚原悠也とコンタクト・ゴンゾ」展をご視察になる信子妃殿下(中央)(写真 MCJP 支援協会)



平安装束の前で記念撮影(写真 MCJP 支援協会)

③ 地上階展示「Japon Afrique intimes」

筆者はパリ日本文化会館事業の柱の一つとしてアフリカとの文化交流を掲げてきました。今回はその一環としてカメルーンのアーティスト兼デザイナーであるセルジュ・ムアングさんの提唱している「和フリカ」というコンセプトのもと「WAFRICA- Japon Afrique intimes」と題する展示会を地上階ホールで実施します。会期は2月18日(火)から3月21日(土)までの5週間と地上階展示としては異例の長期となります。

ムアングさんとは2018年2月1日にパリの画廊で出会いました。日本の漆芸家大西長利東京藝術大学名誉教授の作品が展示されていたコーナーでした。ムアングさんはフランスの国立工業デザイン高等専門学校(ENSCI)で学んだ後、オーストラリアで2002年にプリツカー賞を受賞した建築家グレン・マーカットとともに仕事をし、日本に渡り5年間を過ごします。その間に「和フリカ」というコンセプトを創造して芸術監督として活躍します。彼の作品はアムステルダムのヴァン・ゴッホ美術館やニューヨークの芸術デザイン美術館で展示され、ケニアのナイロビで開かれた第6回 TICAD でも特別展示されました。

今回の展示会には、次のような作品群が出品されています。

- ① 和フリカが2008年に最初に手掛けた西部アフリカの布と京都の呉服メーカーの協力のもとに制作した「アフリカンきもの」を身に着けたアフリカ女性の大判写真3点。
- ② 日本の漆芸家9代目大河原勝氏と共同制作したアフリカのピグミー族の村長が用いる木彫りの遮光型土器に似た人形型の椅子を磨いて朱の漆を塗った「ブラッド・ブラザーズ(血の兄弟)」(2010年)という4体の作品。
- ③ 東京藝術大学名誉教授で漆芸家の大西長利氏と共同制作した生命の創造や子孫繁栄を祈る儀式で使われるナイジェリアやタンザニアのマスクに黒漆と螺鈿多金箔をあしらった「コスモス(宇宙)」(2018年)と題する作品。
- ④ 大河原勝氏との共同制作になる架空の動物を象徴するマリの木彫マスクに黒漆を塗った「ゴルゴタ」(2018年)と題する作品3点。
- ⑤ ガボンのマスクにカメルーンの布地をかぶせ、黒髪に簪をさした様々な年齢の女性像14体をインスタレーションした「セブン・シスターズ」(2020年)と題する、普遍的な女性の社会を探求した作品。
- ⑥ 大河原勝氏との共同制作になるはかない架空の存在を表現したマリのマスクに緑漆を塗った「ササ」(2020年)と題する「ささやき」をテーマにした作品。
- ⑦ トヨタ欧州デザイン開発センターのデザイナーや羽を扱うアーティスト、エリック・シャルル=ドナシャンと共同制作した「ハネカゼ(羽風)」と題する西アフリカのブドゥー教と日本の神道に共通する霊的な存在を表現した超自然的な作品。

画期的な展示会であり、18日に開催されたオープニングにはアフリカ系の人々を含め、大勢の人々が参加しました。会期中の来館者の反応が楽しみです。

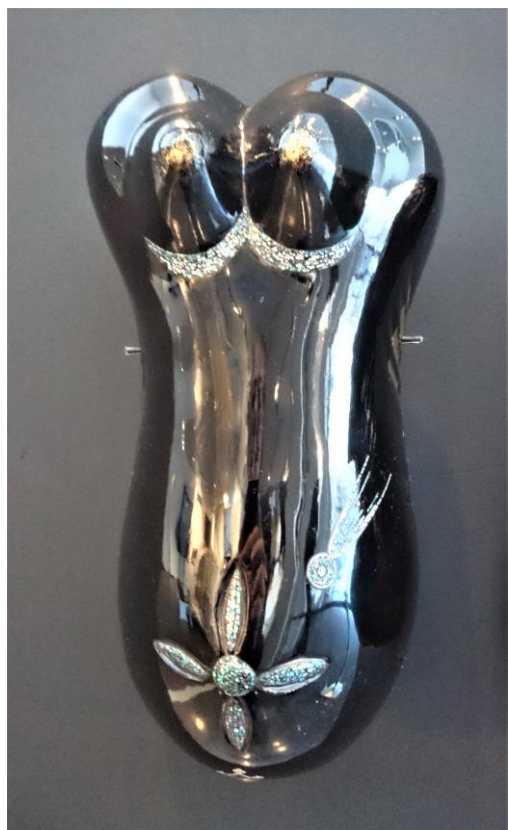


「Japon Afrique intimes」展オープニングに集まった人々



「Japon Africa Intimes」展の展示風景

手前から「セブン・シスターズ」「ブラッド・ブラザーズ」「アフリカンきもの」



漆芸家大西長利氏との共同制作になる「コスモス」



漆芸家大河原勝氏との共同制作になる「ササ」

7



トヨタ欧州デザイン開発センター&エリック・シャルル=ドナシャンとの共同制作になる「ハネカゼ」

以上